

村田 周祐『ムラは課題の集積地なのか』より抜粋

湯原の事例

次にご紹介するのは、宮城県の南西に位置する七ヶ宿町湯原（しちがしゅくまちゆの はら）です。七ヶ宿という名が示すように、江戸期には参勤交代にも使われた羽州街道 と奥州街道を結ぶ七つの宿場町のひとつとして栄えた地域ですが、1905 年に奥羽本線が 開通して七ヶ宿が主要交通網から外れて以降、その生業は養蚕や製炭へと移っていきま した。とりわけ製炭業は活況を呈し、1940 年頃には県下一の製炭生産量を誇っていまし たが、戦後の燃料革命以降は衰退し、一時は 5000 人を超えていた人口も七ヶ宿町全体 で 1263 人（2022 年 4 月現在）となっています。

湯原を歩くと改めて、高齢者や空き家が多いことに気づかされます。2018 年 6 月現在 で、湯原の居住人口の約半数（45.5%）が 65 歳以上、三分の一が 80 歳以上であり、ま た、102 の家屋のうち 22 戸が空き家となっています。

こうしたデータからのみ判断すれば、湯原は社会的共同生活が困難とされる「限界集 落（人口の 50%以上が 65 歳以上）」の条件をほぼ満たしています。にもかかわらず、湯 原の人びとの言動に限界集落という言葉から連想されるような絶望感はありませんし、 社会的共同生活が滞ったという話も聞きません。湯原の人びとはこの地で生活し続ける ために、どのようなしくみを築いているのでしょうか。

湯原における最大の生活課題は宮城県下有数の降雪量から生じる除雪問題です。具体 的には「小型除雪機を使って一時間の軒下の雪かき」が必須の日課であり、もしもこの 日課を実施できなかった／できなくなった場合、屋根や軒先に落ちた雪と屋根に積もっ た雪がつながって柱のように凍り付き、最終的には家全体が雪氷の壁に覆い隠されてし まうのです。

湯原で暮らすためには日々の除雪作業が必須となる

そのため湯原では、軒先を覆う雪氷の壁を破壊し、屋内に光を入れ、軒先に新たに雪 を落とす空間を作り出す作業を「軒先を空ける」と呼び、通常の「雪かき」とは区別し ています。軒先を空けるには、軒先や屋根の上に登り、雪氷をスコップやハンマーなど で破壊する必要があるため、重機を使用できない手作業となるため、身体機能が低下した年 配者などには難しく、危険な作業となります。

仲間集団「スノーフィールズ」

こうした自宅の除雪は各戸の家族労力によって担われることが現在でも基本となっ ています。しかし、1990 年代の後半になると近隣に他出子（＝家を出て暮らす子供）も親 類もいない独居老人宅、つまり私的領域の問題を家族労力のみで解決できない家が出現

するようになりました。そこで、1998 年に、湯原に暮らす若い男性の有志 8 名が村内ボランティア組織「湯原スノーフィールズ」を結成し、家族労力のみで除雪できない家の除雪を無償で引き受けるようになりました。ところが、思いも寄らない問題によってこの活動は頓挫してしまいます。

その問題とは、軒先を空けるという重労働への「お返し」でした。「お返しはいらない」と伝えても、飲食物や金銭など、様々な形でお返しが戻って来てしまうのです。しかも、「あの家がこれくらいなら、うちはこれくらいしないと」といって豪華な夕食が準備されるなど、お返しはどんどん高騰していきました。その結果、スノーフィールズの活動は、「迷惑をかけてしまうから、頼む方も頼まれる方も遠慮するように」なり、機能不全に陥ってしまったのです。

こうした事態の背景にあるのは、ムラの助け合いにおける論理です。佐久間政広によると、「村内の共同」には、ムラの公的領域に関わる「むら仕事の共同」と家々の私的領域に関わる「ゆいの共同」の二つがあり、それぞれは現代の農山漁村においてもしっかりと区分されています。大浦のテイチの活動は前者に、湯原における各戸の除雪は後者に該当します。

「ゆい」は農村社会に古くから見られる家同士の助け合いのしくみです。たとえば田植えや稲刈りのように短期間で集中的な労働力を必要とする際に、複数の農家が労働力を出し合い、順番に各戸の作業をしていくのです。重要なのは「ゆい」は労働力の「貸し借り」であり、ある家に助けてもらったら次はその家を助けなければいけないということ。

ムラではどんなことでも助けてもらえるというイメージがあるかもしれませんが、決してそんなことはありません。私的空間に関わる事柄は「give and take」が原則なのです。だからこそ、雪かきという労働に対してお返しが発生し、仮にその受け取りを拒否すれば、それはその家を「一軒前」として認めないこと意味してしまうのです。

この問題を解決するためにスノーフィールズが目をつけたのが、2006 年から七ヶ宿町が実施した「雪害対策政策」でした。スノーフィールズのメンバーらはこの政策による補助金の受け皿として「湯原雪害対策委員会」を立ち上げ、除雪作業を有償化（1 時間 2,000 円、80 歳以上は 1 時間 1,000 円）しました。こうすることで、軒先を空けることへのお返しを「少額の金銭」に限定してお返しの「高騰」を防ぎつつ、その家の尊厳を守ろうと考えたのです。「おばあちゃん。町から補助金が出てっけら、お返しはいらねんだあ。不足分の千円だけもらえますかい」といったように話すことで、「ゆい」の原理に背くことなく、自宅の除雪をヨソの人が助けることを可能としたのです。

ムラと外部

2010 年代になると、湯原の除雪に新たな問題が生じてきます。それは、スノーフィールズのメンバーが高齢化し実質的に 3 名にまで減少したこと、そして「助けるべき家」

が増加してきたことです。そこで新たにはじめたのが、村外からの支援の受け入れです。都市部の市民や地域おこし協力隊（地域支援）、仙台市にある大学の学生たちを村外除雪ボランティアとして受け入れるようになったのです。ここで大事なのは、この村外除雪ボランティアがスノーフィールズの活動の一部として湯原の人びとに認識されているということです。

村外除雪ボランティアの作業は、スノーフィールズの「仙台の学生さんがね、除雪体験をしたいんだって。おばあちゃんの家で体験させてもらっていいかな」といった声かけから開始されます。ここでは自宅を村外者の除雪体験や教育の場として無償提供する「お返し」として、スノーフィールズによる除雪作業が無償提供される形式がとられています。つまり、村外除雪ボランティアはそのままムラに入り込むのではなく、スノーフィールズによる除雪活動の一環へと組み換えられているのです。

村外ボランティアによる除雪作業

ただし、スノーフィールズは、住んでいる人では除雪できないすべての家を助けるわけではありません。その理由を、ある自治会長は次のように説明します。

独居だからといって、むやみやたらさ助けっと、子供とか親戚が帰ってくる理由を奪ってしまうべや。んだがら、子供が帰ってくる分だけ雪を残して、子供さ電話しなよって声をかけていっちゃ。（2016 年のフィールドノートより）

つまり、湯原の人びとは、生活課題解決の好機であるはずの除雪ボランティアの対象からあえて特定の家々を除外することにより、他出子とこれらの家の関係を「切らない」ことを意図的に選択しているのです。もしもボランティア精神を絶対的な善と信じ込み、除雪を無差別に行えば、子供たちと家の関係は切れてしまうからです。湯原の人びとからは、どんなに崇高な理念や技術であっても、その土地の個性や状況に応じて、その内容を変えなければならないと教えられます。

出典：トイビト「ムラは課題の集積地なのか」2023. 6. 20

<https://www.toibito.com/toibito/articles/%E3%83%A0%E3%83%A9%E3%81%AF%E8%AA%B2%E9%A1%8C%E3%81%AE%E9%9B%86%E7%A9%8D%E5%9C%B0%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%8B>